HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小規模博物館で活用可能な来館者基礎情報調査ツールの開発に関する実証的な研究～文学館を事例として～[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大西, 慶
Citation	北海道大学. 博士(理学) 甲第15745号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92479
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kei_Onishi_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称　博士（理　学）　　氏　名　　大　西　慶

審査担当者　主査　教　授　湯　浅　万　紀　子
副査　教　授　池　田　文　人
副査　准教授　山　田　邦　雅
副査　准教授　岩　間　徳　兼

学 位 論 文 題 名

小規模博物館で活用可能な来館者基礎情報調査ツールの開発に関する実証的な研究
～文学館を事例として～

博士学位論文審査等の結果について（報告）

日本の博物館界では 1990 年代より博物館をめぐる社会状況の変化に伴い、博物館評価に関する実践と研究が盛んに行われるようになった。一般に、来館者の属性や展示の満足度などを問う留め置き式の質問紙調査は多くの館でなされているものの、その回収率は低く、その調査結果を分析して、館業務のなかにシステマティックに反映させている報告は少ない。また、『日本の博物館総合調査報告書』（日本博物館協会, 2017）では、日本の博物館の典型的な姿は、来館者数が 5,000 人未満で、職員数も限られ、かつ財政面においても厳しい状況にあることが示されている。このような日本の博物館の大半を占める小規模な博物館では、体系的な評価を実施するに至っていない場合が多く、館の課題として認識されている。

本論文は、以上の博物館評価をめぐる状況のなか、小規模館、特に博物館研究の対象として報告例が極めて少ない文学館を対象とした。博物館評価を始める第一歩として、評価に不可欠な来館者の基礎情報を収集･記録・分析する利便性の高いツールを開発して、複数館で運用し、ツールの改善・カスタマイズを進めて、小規模館における博物館評価のあり方を探究することを目的とし、実証的な調査研究を展開した。

まず、来館者の基礎情報に焦点を当て、このデータを収集・分析する「来館者基礎情報記録ツール」を開発した。博物館の受付に設置して、受付スタッフがタッチパネルで操作して来館者の基礎情報を収集するツールであり、ソフトウェア部分はオープンソースソフトウェアとして無料で利用できるプログラミング言語 Python を用いて独自に開発した。これを小樽文学館をはじめ 8 館にて実運用し、回収率を大幅に上げてデータを収集した。運用の過程では、各館の職員との意見交換を重ねてツールをカスタマイズした。集計結果から来館者層の概要を示すことができただけでなく、館間横断的に集計した結果を各館に提示し、文献調査と各館スタッフの知見を基に考察を深め、その結果、来館者層の形成について、各文学館の特徴と関連付けて解釈が可能であることを確認できた。

さらに、「来館者基礎情報調査ツール」として、来館者の基礎情報の記録と分析を包括したシステムの開発に取り組み、「来館者基礎情報記録ツール」からクラウドに来館者の記録を保存し、クラウド上にウェブサーバを立ち上げてリアルタイムで来館者の基礎情報を閲覧できる構成とした。以上の結果、オープンソースソフトウェアを用いて開発し、実施検証を介して小規模館にて運用可能な基礎的な来館者の基礎情報を記録・集計・分析するツールを実現し、これらの館で博物館評価の第一歩を始める基盤を構築できた。

この実証的な研究は、これまで博物館学的な調査・研究が未開拓であった文学館について、そ

の来館者層の形成の要因の一部を明らかにすることができた点から、さらに博物館研究のなかでも重視されている博物館評価の一歩を、小規模館でも上記ツールを運用することで進められることを示した点で、学術的な意義があり、当該分野の研究の発展に資するところが大きい。

よって著者は、北海道大学博士（理学）の学位を授与される資格あるものと認める。